

“男と女はこんなに違う！”を受け入れやすい女性 性 両面価値的性差別とジェンダー相違モデルの性 差観との関連性

著者	倉矢 匠
著者別名	KURAYA Takumi
雑誌名	東洋大学大学院紀要
巻	54
ページ	121-140
発行年	2017
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00009731/

“男と女はこんなに違う！”を受け入れやすい女性 —両面価値的性差別とジェンダー相違モデルの 性差観との関連性—

社会学研究科社会心理学専攻博士後期課程3年

倉矢 匠

要旨

世間には、心理的な側面における男女の違いを強調した常套句 (i.e., ジェンダー常套句) が数多く流布している。本研究の目的は、そのように男女を、心理的特徴の面ではっきりと異なったカテゴリーに分けて捉えることを是認する程度を調査することであった。特に、異性に対する2種類の性差別的態度 (敵意的性差別と慈愛的性差別) によりそうした情報の受け入れやすさが予測されるか否かが検証された。女子学生174名を対象に調査を実施した結果、男性に対する慈愛的性差別態度が強い女子学生ほどジェンダー常套句の内容を是認する程度が高いことが示された。さらに、慈愛的差別が強い一方で同時に敵意的差別は弱いという場合には、常套句を是認する程度が高いことが示された。これとは対照的に、慈愛的差別が弱いと同時に敵意的差別も弱いという場合には、常套句を是認しにくいことも示唆された。最後に今後の課題として、社会の中で自らの性別を受容している程度が、男女の心理的違いを強調した情報の受容に影響を与える可能性について議論がなされた。

キーワード：両面価値的性差別主義, ジェンダー常套句, ジェンダーステレオタイプ, 心理的性別二分化, ジェンダーシステム正当化, 生物学的本質主義

女は深く見るが、男は遠くを見る。男にとっては世界が自分で、女にとっては自分が世界。

— Christian Dietrich Grabbe (戯曲 “Don Juan und Faust” より)

問題

「男と女はこんなにも違う！」といった話題は、書籍やテレビ、SNSをはじめとするWebサイト上などで目にすることが少なくない。例えばGray (1992 大島訳 1993) の「ベスト・

パートナーになるために一男と女が知っておくべき『分かち愛』のルール」(原題: *Men Are From Mars, Women are From Venus*) は全世界で3000万部を超すベストセラーとなった。また、我が国でも「話を聞かない男, 地図が読めない女—男脳・女脳が『謎』を解く」(Pease & Pease, 2000 藤井訳 2000) は200万部を超すベストセラーとなった。それ以降も、男女の心理的側面における相違性をキャッチーに表現した書籍は出版され続けている (e.g., 「キレル女 懲りない男—男と女の脳科学」: 黒川, 2012; 「察しない男 説明しない女—男に通じる話し方, 女に伝わる話し方」: 五百田, 2014)。また、最近ではインターネット上のいわゆる“まとめサイト” (e.g., 2ちゃんねるまとめ, NAVERまとめ) やSNS (e.g., Twitter, Facebook) 上でも、行動や思考パターン、性格、能力、趣味、選好などにおいて、如何に男女が異なっているのかを強調した情報が溢れ、多くの人がそれに共感を示し、その情報をさらに拡散させる様子も見受けられる。なぜ人々は、心理的側面における性差の話題をそれほど好むのだろうか。そもそも、女性と男性は心理的に見て、本当にそれほど大きく異なっているのだろうか。

男女間にどのような違いがあるのかという話題は、心理学やその関連学問領域において、最も長く、一貫して関心が寄せられてきたテーマの一つである (Hyde, 2014)。たしかに、素人信念とも一致した、男性と女性は心理的側面において大きく異なるという“ジェンダー相違モデル”の性差観を支持し、「男と女はやはり、違う惑星からやってきた生物とっていいほど心理的に違う」と主張する研究知見が存在する (Del Giudice, Booth, Irwing, 2012)。一方で、男女の間には心理的にほとんど違いはない、という“ジェンダー類似モデル”の性差観を支持する研究知見も近年、増えてきている。例えば、“男脳と女脳”という、世間ではお馴染みとなっているフレーズについても、脳の構造に関して男性と女性を非連続的、すなわち質的に異なる別のカテゴリーとして捉えることは適切でないと指摘されている (Joel & Fausto-Sterling, 2016)。すなわち、“男脳”や“女脳”と表現し、あたかも両性の脳構造に明確な違いが存在するかのように印象づける情報は、事実を誇張し、捻じ曲げたものといえる。また、心理的特徴においても、分類分析 (taxometric analysis) によって、両性は連続的であり、分類して捉えることは適切ではなく、「男女は同じ地球に生まれた」と指摘する知見も示されている (Carothers & Reis, 2013)。

心理的性差に対するこの誇張を、メタ分析 (meta-analysis) およびメタ統合 (meta-synthesis) を用いてより明確に示した知見がある。男女の心理的違いに関し同じ仮説を検討した複数の研究に対しては、個々の研究から得られた統計量を共通の効果量 (effect size) へと変換することで、その差がどの程度の大きさで、影響力がどれほど大きいのかを検討することができる。なお、性差のような2群間比較における効果量では一般にCohen (1988) の d -scoreが用いられる。Hyde (2005) は“性差がある”ことで有名な心理指標に関する124のメタ分析で示された性差の効果量に注目した。その結果、それらの指標のうち30%で

“性差は限りなくゼロに近い”こと、そして48%で“性差はごくわずか”であることが見出された。すなわち、心理学者たちが“性差がある”と報告している心理現象のうち約8割で、実際には“ほぼ（または全く）性差がない”とする結論が導かれたのである。これに加え、ジェンダー類似モデルをより正確に再評価するために、性差があるとされる386の心理指標をメタ統合した研究の結果からも、約40%の指標で“性差は限りなくゼロに近い”こと、そして46%の指標で“性差はごくわずか”であることが見出され、心理指標における性差の絶対値平均は $d = 0.21$ でしかなく、男女のオーバーラップが84%にも及んでいることが示されている（Zell, Krizan, & Teeter, 2015）。

心理的な性差が実際にはそれほど大きくないのであれば、人々は「男と女は心理的にまったく異なる」という一種の幻想を抱いていることになる。これまでに多様な心理指標において、男女がどの程度異なっているのかが実証的に示されてきた一方で、人々が知覚している性差の程度がそれらの研究知見からどの程度ずれているのかを検証した研究は多くない（see Halpern, Straight, & Stephenson, 2011）。しかし、人々が男女の違いをどのように知覚しているかは、実社会において大きな影響をもたらす可能性がある。例えば、科学分野における成績の男女差を過剰に知覚している女性は、科学分野で必要となる能力を低下させてしまい、科学と関連のある分野への進出を断念しがちであることが知られている（Ehrlinger & Dunning, 2003）。また、ステレオタイプ脅威に関する研究で、「女性は数学が苦手である」というステレオタイプ情報が活性化することにより、実際に女性たちが数学の成績を下げる結果を招いてしまうことも知られている（Nguyen & Ryan, 2008; Spencer, Steele, & Quinn, 1999）。そして、男女の違いに関する知覚や知識が一度確立されてしまえば、確証バイアスにより人々はそうした男女の違いと一致する情報をさらに受容し、バイアスを強化してしまう（Ditto & Lopez, 1992; Rudman & Fairchild, 2004）。

こうした点を踏まえると、事実を曲げ過剰に心理的性差の存在を示す情報が社会に溢れ、人々がそれを受け入れてしまうことにより、結果として、自己成就的に実際に社会の中で男女が心理的に異なった言動や心理変化を示し、経験する可能性が高い。この点に対して、Ruti (2015) は、ジェンダー・プロファイリングという概念を用い、警鐘を鳴らしている。それは、科学者（特に脳科学者や進化生物学者、進化心理学者）が大衆向けのメディアや自己啓発本を通じて人々に、「男女の心理的特徴が決定的かつ対照的に異なること」と「それゆえに男性と女性は本来的に分かり合えず、すれ違いは当然であること」の2点を大前提とした上で、「男女が互いの“違い”を理解し適切に行動する（i.e., ジェンダー・プロファイリングする）よう努力すれば、良好で永続的な関係を構築・維持する可能性が高まり、幸せな将来が約束される」と信じこませている、という問題である。そして、ジェンダー・プロファイリングという皮を被せた、あからさまなジェンダースtereotypesの適用が、大衆に促されていることが指摘されている。

確かに、Hyde (2005) が自ら指摘しているように、実世界においては、仮に何か1つの“違い”が微小であったとしても、そこから連鎖的に様々な違いが生じて、結果的により大きな違いが導かれることも否定はできない。その意味では、性差の効果量のごくわずかであったとしても“性差がある”という事実を無視することはできないであろう。しかし、心理的な性差を実態以上に過大視する性差観が促されることで、人々が心理的性差をより広げるような行動を実践してしまうことも考えられる。特に、社会には未だ性別に基づく差別や不平等の問題が多く存在しているが (World Economic Forum, 2015), その背景には、人々が心理的な面で男女を対比的、相補的に捉え、あたかも社会の中でうまく具合にバランスが取れているかのように錯覚することによる強い影響が示唆されている (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick & Fiske, 2001; Jost & Kay, 2005)。また、心理的性差に対する過大視は必ずしも普遍的な傾向とは言えず、個人差があることも示されている (Hall, & Carter, 1999; Jussim, 2012)。個々の心理指標における性差の大きさをどの程度正確に知覚できているかという点も重要ではあるが、全体的な性差観として、男女は心理的に大きく異なるというジェンダー相違モデルと、心理的な性差はほとんどないというジェンダー類似モデルのどちらをもつのかに関する個人差を考えた場合に、性差別を受容する程度や性差別的態度がそこに影響を与えている可能性が考えられる。

両面価値的性差別主義と性差に対する知覚

性別に基づく差別と偏見を性差別と一般に呼ぶ。人々が示す性差別的態度には、いわゆる「あからさまな」性差別的態度だけでなく、一見すると好意的に思ってしまう「現代的」で「巧みな」性差別的態度が存在することが指摘されており、前者を敵意的性差別主義 (Hostile Sexism; 以下HSと表記)、後者を慈愛的性差別主義 (Benevolent Sexism; 以下BSと表記) としてそれぞれ捉える両面価値的性差別理論 (Ambivalent Sexism Theory) が提唱されている (Glick & Fiske, 1996, 1997)。性差別は元来、女性を対象に行われるものという認識が社会的に強かったこともあり、HSは女性がセクシャリティやフェミニズムにより男性を統御しその勢力を奪おうとしている、という見方で男女の関係性を捉え女性に対しての反感を表す態度とされている。一方、BSは伝統的女性役割を享受している女性を保護され崇拜されるべき純粋な存在とみなす、一見すると好意的で騎士道的な態度とされる。

BSはHSに比べると性差別的ではないものと認知されやすいが、このような形で女性を理想化することは、女性を弱く、伝統的女性役割に適したものと位置づけることを意味し、結果的には女性を限定的な役割に押し込め、現存の男女格差を心地よく合理化する働きを持つとされる。例えば、妊娠している女性に対する周囲の行動を考えると、妊娠している (= 伝統的) 女性は、妊娠していない女性よりも保護的にやさしく扱われ、ここには周囲からのBSが反映されるが、その女性が求職する (= 非伝統的) と非難を被り否定的に扱われ、こ

こには周囲からのHSが反映される (Hebl, King, Glick, Singletary, & Kazama, 2007)。このように、敵意と慈愛という一見相反する性差別主義であるが、それぞれがアメとムチとして女性を伝統的役割に留まらせ、ジェンダー不平等を正当化し維持する機能を持っている。また、両面価値的性差別の考え方は、そのまま男性に対する性差別まで枠組みが広げられ、男性に対するBS、HSも女性に対する性差別と同様、相補的に働きながら、現行のジェンダーシステムの正当化と維持に寄与しているものとされる (Glick & Fiske, 1999)。

ジェンダー常套句と両面価値的性差別理論

先述した両面価値的性差別理論に基づく、性差別的な信念は、男女を心理的に異なるものと捉えることに由来するとともに、それにより強化される可能性が示唆される (Glick & Fiske, 2011, 2012; Lee, Fiske, & Glick, 2010)。特に、HSは競争的な文脈、BSは相補的文脈において、それぞれ、男女を心理的に二分化することに由来する可能性が考えられる。したがって、HSとBSはどちらも、人々に性差を過大視させるよう促す効果を持つと予想される。

男女の心理的な違いに関して世間に流布している常套句の多くは、行動や思考パターン、性格、能力、趣味、選好などにおいて、如何に男女が異なっているのかを強調している。本研究では、このように世間に流布しているジェンダー相違性を誇張する言説をまとめて、「ジェンダー常套句 (Gender Cliché)」と称し、用いることとする。ジェンダー常套句には、ある一つの心理指標に関して単にどちらかの性別がもう一方を大きく上回り、大小関係を明示するという観点から性差を表現している (e.g., 「女は一日中恋をされているが、男は時々しかしてられない」) ものはあまり多くない。むしろ多くの常套句では、ある一つの心理指標が二つの次元を持つかのような表現をされたり (e.g., 「男はスリルを求め、女は安定を求める」、一つの心理指標の中で二つの次元が見出されたり (e.g., 「男は肉体的に相手を攻撃するが、女は言葉で相手に攻撃をする」)、関連のある二つの心理指標を持ち出してそれらを二つの次元に見立てる (e.g., 「女性は共感を求め、男性は解決を求める」) などし、二軸の中で男女が対比的、相補的に表現されることが目立っている。そのため、たしかにHSとBSはどちらも人々に性差を過大視させるよう促す効果を持つと予想されるが、ジェンダー常套句の是認度をよりよく予測するのは、HSよりもBSである可能性が高いことが期待される。その一方、HSの高さが非伝統的役割に従事する者 (e.g., 女性的な男性、男性的な女性) への否定的反応を予測することが示されており (Glick, Wilkerson, & Cuffe, 2015)、HSの高い人物は「男であること」「女であること」を、男女がそれぞれ固着し続けるべき別々のカテゴリーとしてみなすことが示唆されている。したがって、ジェンダー常套句を是認する程度をHSが予測する可能性も高いと考えられる。

心理的な性別二分化と関連が予想されるその他の指標

性差別的な態度以外にも、男女の心理的な違いを過大視しやすい傾向を予測する個人差がいくつか考えられる。

第一に、心理的本質主義があげられる。心理的本質主義とは、当該カテゴリーに属することを意味する「核」をなす変わることのない「本質」が存在すると信じる傾向を指し、特に、カテゴリー間の相違が生物学的基盤によるものとみなす信念と、その相違が不変的であるという信念が伴われる (Haslam, Rothschild, & Ernst, 2000 ; Rothbart & Taylor, 1992)。心理的本質主義信念は、ステレオタイプ化された男女の性質に対する生得的説明への是認と関連する (Bastian & Haslam, 2006) だけでなく、男性・女性というカテゴリーの境界性の明確さや固着性の認知を人々が管理する上で方略的に喚起されることが示されている (Morton, Postmes, Haslam, & Hornsey, 2009)。また、ジェンダーに関する様々な側面を生物学的に、生まれつき備えられたものとして捉える信念によって、ジェンダーステレオタイプに対する是認が強まることが示されている (Brescoll, Uhlmann, & Newman, 2013 ; Kray, Howland, Russell, & Jackman, 2017)。これらの知見は、心理的性差を生物学的起源に由来すると捉えることで、人々がジェンダー不平等な現状を不変的なものと感じ、合理化する機能が存在することを示唆する。したがって、生物学的本質主義信念の個人差は、男女の心理的な違いを強調する常套句を是認する程度を予測し、ジェンダー不平等な現状を合理化する可能性が考えられる。また、生物学的本質主義と両面価値的性差別、特にBSとの関連性はこれまでに検討されていないため、本研究では、この二つを同時に扱う。

性差別的態度以外で、男女間の心理的な違いを過大視しやすい傾向を予測する可能性が考えられる二つ目の個人差は、システム正当化動機である。先行研究によれば、BSは現状のジェンダーシステムを正当化することと関連する (Connelly & Heesacker, 2012)。また、Jost et al. (2005) は、女性的特性を、男性的特性とは異なりつつも同等に価値あるものと捉えるようプライミングすることで、女性参加者のみがジェンダーに関する現状システムへの正当化を強めることを示した。これにより、現行社会の中で不平等を強いられている女性が、相補的な文脈において男女の違いを受け入れることにより、自分たちが社会的にみて地位の低い立場に置かれている実態を合理化している可能性が示唆される。したがって、現行のジェンダーシステムに対する正当化動機の個人差が、ジェンダー常套句を是認する程度を予測する可能性が考えられる。

研究の概観と仮説

本研究の目的は、男女の心理的違いに関して世間に流布している言説、すなわちジェンダー常套句の内容を受け入れやすくしている個人差要因を検討することである。なお、上述した、Jost et al. (2005) の研究結果を踏まえ、本研究では女性のみを調査参加者とした。

まず予備調査によって、男女の心理的違いに関する常套句が収集され、認知度が一定以上の高さであった18個のジェンダー常套句が最終的に本調査で用いられた。本調査では、男性に対する敵意的性差別（HS）、男性に対する慈愛的性差別（BS）、生物学的本質主義（Biological Essentialism; 以下BEと表記）、ジェンダーシステム正当化動機（Gender System Justification; 以下GSJと表記）の4つの心理指標と、上述した18個のジェンダー常套句の内容を是認する程度について、女子学生に評定を求める。

男女の心理的性差を強調する情報として本研究で用いられるジェンダー常套句は、基本的に男女の違いを対比的、相補的に表現したものである。また、BSは相補的な文脈で異性に対して示される性差別であり、HSは競争的文脈で示される性差別である。このことから、まず、以下の仮説を導いた。

仮説1) ジェンダー常套句への是認度に対する予測力はHSよりもBSの方が高い。そしてBSが高いほど、是認度も高くなる。

さらに、BSが高い場合には、異性との間に心理的性差があることを積極的に知覚することが予測されるが、HSが高い場合には、自分の中に感じている異性に対する敵意の由来を、自分たちとは違う「男」の特徴に帰する可能性が考えられる。そのため、2つ目として以下の仮説を導いた。

仮説2) BSが高く同時にHSも高いと、BSが高く同時にHSが低い場合よりジェンダー常套句への是認度が低くなる。

また、BEは男女の違いの不変性の認知は高めるものの、男女は「どこかしら違う」という感覚でしかない。一方、BSは男女が相補的に違っていることを基本としたものであり、相補的な男女の違いを表す常套句内容を是認することで、相互的な強化をしながら現状の正当化を高める可能性が高い。このことから、3つ目として以下の仮説を導いた。

仮説3) ジェンダー常套句への是認度に対する予測力はBEよりもBSの方が高い。そしてBSが高いほど、是認度も高くなる。

さらに、Jost et al. (2005) において、男女の違いを相補的に捉えることが現行の社会システムの正当化を強めると示されているため、BSとGSJは交互作用を示す可能性がある。このことから、4つ目として以下の仮説を導いた。

仮説4) BSが高い時にのみ、GSJがジェンダー常套句内容への是認度を予測する。その際には、GSJが高いほど、是認度も高くなる。

方法

調査の対象者と実施時期 都内の私立大学に通う女子学生174名（平均年齢 19.40 歳， $SD = 1.00$ ，年齢範囲 18 - 22 歳）が調査に回答した。調査は2017年6月初旬に実施された。

素材

ジェンダー常套句の受容度 まず学生32名（うち男性10名；平均年齢20.40歳， $SD = 1.06$ ，年齢範囲19-24歳）に対し，友人との会話，テレビ，書籍，インターネットを通じて，「男女の違い」にまつわる言説を自由にできるだけ多く収集してくるよう依頼した。なお，収集期間は2週間であった。その後，収集された言説と，研究者本人が見つけてきたものを合わせ，合計45個の言説が用意された。続いて，学生280名（男性101名；平均年齢19.80歳， $SD = 1.18$ ，年齢範囲18-22歳）に対し，その45個の言説について，その言説またはそれと似た内容のものを見聞きした経験の有無を回答するよう求めた。その結果，50%以上の認知度を示した18項目をジェンダー常套句として本調査で用いた。

本調査では18項目それぞれの是認度に対し，6件法（0.「まったく納得できない」～ 5.「非常に納得できる」）で回答を求めた。18項目の内容は以下に示した通りである。

「男は加点方式で女を評価し，女は減点方式で男を評価する」「落ち込んだ時，女は共感されると元気を取り戻し，男は励まされると元気を取り戻す」「男は相手の最初の男になりたい，女は相手の最後の女になりたい」「女は衝動買いをするものだが，男は買うものを決めてから出かける」「男は空間認識能力がすぐれており，女は言語能力がすぐれている」「女の恋愛は“上書き保存”だが，男の恋愛は“名前をつけて別保存”である」「男は相手を“選びたい”，女は相手と“出会いたい”」「男は“行きつけ”の場所に行きたい，女は“はじめて”の場所に行きたい」「女は感情で動き，男は理屈で動く」「男は安心すると浮気をし，女は不安になると浮気をする」「女は記念日が好き，男は日常が好き」「男は“結果”を重視するが，女は“過程”をより大切にする」「浮気された時，女は浮気相手の女に対して怒りを覚えるが，男は浮気した自分の女に怒りを覚える」「男は1つのことを突き詰めるのが得意，女はマルチタスクが得意」「男はナンバーワンが嬉しく，女はオンリーワンを喜ぶ」「女は“共感”を求め，男は“解決”を求める」「男は人前で話が長く，女は気を許した相手に話が長い」「男は嘘をつく時に相手から目をそらし，女は相手の目を見つめて嘘をつく」

男性に対する両面価値的性差別主義尺度 Glick et al. (1999) の尺度を阪井 (2007) が日本語に翻訳したものをを用いた。敵意的性差別 (HS) 10項目と慈愛的性差別 (BS) 10項目，計20項目に対し，6件法（0.「非常に反対」～ 5.「非常に賛成」）で回答を求めた。

敵意的性差別 (HS) 「女性に性的に魅せられた男性の多くは，性的な関係を持ちたいがゆえにモラルを無視した行動をとる」「男性が女性を手助けしようとする行為は，男性が女性よりすぐれていることを示すために行っている」「もしもこの世に女性がいなければ，男性は途方に暮れるだろう」「男性は病気の時には，赤ん坊のように振る舞う」「男性は，女性よりも大きな力を社会に及ぼそうとして争いごとばかり起こしている」「女性の権利に敏感な男性でも，実は家事や子育てをやってくれるような女性と伝統的な家族関係を持

ちたいと望んでいる」「男性は、女性と話す時にいつも主導権を握ろうとする」「ほとんどの男性は、口先だけは男女平等に賛同していても、実際には、一人の女性さえ平等に扱うことができない」「最悪の事態が生じたとき、ほとんどの男性は子どもみたいな振る舞いをする」「ほとんどの男性は、いったん権力を持つと多かれ少なかれ女性に性的な嫌がらせをするものだ」

慈愛的性差別 (BS) 「たとえ夫婦共働きであっても、女性は家庭で男性の世話をするのが当然の務めである」「緊急事態のときに、男性は女性よりも取り乱しにくい」「どんな女性でも、自分のことを大切にしてくれる男性を必要としている」「女性は、男性と長期的で安定した関係を築かなければ、真に満たされた人生を送ることはできない」「男性が役にたつのは、主として女性に経済的安定をもたらすという点である」「どんな女性でも、深く敬愛する男性がいるはずだ」「男性は、自分の危険を省みることなく他人を助けようとするものだ」「女性は、男性なしでは完全とは言えない」「男性は、女性に比べて、リスクを伴う役目を進んで行いがちだ」「男性は自分ひとりでは身の回りの世話ができないので、女性は、家庭では男性の面倒を見てあげるべきである」

ジェンダーシステム正当化動機尺度 Jost et al. (2005) の8項目を翻訳し用いた。社会でのジェンダーの扱われ方について、システムが公平であるか否か、システムを変えるべきか否かという観点でどの程度同意できるかに対して、8項目、9件法 (0.「非常に反対」～8.「非常に賛成」) にて回答を求めた。

(GSJ) 「一般的にいて、男女は公平な関係にある」「おおかた、家庭内における性別役割分業のシステムはうまくできたものといえる」「性役割に対しては、徹底的な改革がなされる必要がある (逆転)」「日本は世界でもっとも、女性にとって生きていきやすい国である」「性別役割分業と関連した政策の大半は、大多数の人に対して利益をもたらしている」「日本の社会では、性差別が年々ひどくなってきている (逆転)」「日本では、裕福で幸せになる機会が、男性にも女性にも平等に与えられている」「社会では大抵、男女がそれぞれに見合う、妥当なものを得るようになっている」

生物学的本質主義信念尺度 Keller (2005) を元にBrescoll et al. (2013) が用いた7項目を翻訳して用いた。心理的な男女の違いを生物学的要因により説明することにどの程度同意できるかについて、9件法 (「0. 非常に反対」～「8. 非常に賛成」) にて回答を求めた。

(BE) 「男女の性格の違いは、遺伝子レベルで決まっているところが多い」「男性が女性よりも数学や科学を好むのは、生まれついた男女の違いによる」「男性と女性で行動パターンに違いがあるのは、男女が生物学的に違う作りをしていることによってほとんど説明がつく」「暴力犯罪の大部分が男性によって占められているのは、男性には女性より

も暴力に走りやすい性質がもともと備わっているからだ」「女性が男性より感情が豊かなのは、そうなるように生まれつきできているからだ」「女性が男性に比べ、喧嘩の際に相手に物理的な攻撃を加えないのは、女性には生まれつき攻撃的な性質がないからだ」「女性よりも男性に数学の教師が多いのは、何か生物学的な男女の違いがあるからだと思う」

結果

各指標の得点化

ジェンダー常套句の18項目 ($\alpha = .93$), BEの7項目 ($\alpha = .90$), GSJの8項目 ($\alpha = .76$) に関しては、いずれも高い内的一貫性を示したため、それぞれの平均値を算出し、その値が高いほど、各特性を強く反映する指標とした。

男性に対する両面価値的性差別主義尺度に関しては、BS, HSともに主成分分析を実施した。その結果、BSに関しては、1因子構造が確認され、10項目すべて十分な因子負荷量 (> 0.53) が示され、高い内的一貫性も示されたため ($\alpha = .86$), 10項目の平均値を算出し、BSの指標とした。一方、HSに関しては、「もしもこの世に女性がいなければ、男たちは途方に暮れるだろう」「女性の権利に敏感な男性でも、実は家事や子育てをやってくれるような女性と伝統的な家族関係を持ちたいと望んでいる」という2項目が十分な因子負荷量を示さなかったため (< 0.15), 本研究ではこの2項目をHSの指標から外すこととした。残りの8項目に関しては、1因子構造が確認され、8項目すべて十分な因子負荷量 (> 0.43) が示され、高い内的一貫性も示された ($\alpha = .80$) ため、8項目の平均値を算出し、HSの指標とした。これら全指標の記述統計量及びピアソンの相関係数は、Table 1 に示した通りである。

Table 1

Descriptive statistics and correlations

	1	2	3	4	5
1. Endorsement of Gender Cliché	.93				
2. Hostile Sexism (HS)	.21 **	.88			
3. Benevolent Sexism (BS)	.70 ***	.28 ***	.80		
4. Biological Essentialism (BE)	.24 **	.37 ***	.37 ***	.92	
5. Gender System Justification (GSJ)	.30 ***	.06 ***	.38 ***	.28 ***	.76
Mean	3.05	2.31	2.32	4.32	3.65
SD	0.92	0.72	0.72	1.31	0.88
Skew	- 0.08	- 0.27	- 0.05	- 0.37	- 0.32
Kurt	- 0.57	0.57	- 0.51	0.62	0.09

Note. $N = 174$; Cronbach's alpha is shown in the diagonal in bold.

[†] $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

Table 2
Hierarchical Regression Analysis for
Gender-Relevant Constructs Predicting Endorsement of Gender Cliché

Predictor variable	Step 1				Step 2			
	<i>B</i>	ΔSE	β	95% CL	<i>B</i>	ΔSE	β	95% CL
Step 1								
HS	.04	.08	.03	[-.09, .15]	-.05	.08	-.04	[-.16, .08]
BS	.71	.07	.69 ***	[.56, .81]	.71	.06	.69 ***	[.57, .81]
BE	-.04	.05	-.05	[-.18, .08]	.01	.04	.01	[-.12, .13]
GSJ	.06	.06	.06	[-.06, .18]	.07	.06	.07	[-.05, .18]
Step 2								
BS \times HS					-.22	.06	-.20 ***	[-.30, -.09]
BS \times GSJ					.12	.06	.12 *	[.07, .22]
R^2			.49				.54	
R^2_{Adjusted}			.48				.52	
F			40.93 ***				32.45 ***	
ΔR^2							.05	
F for ΔR^2							8.36 ***	

Note. HS = Hostile Sexism toward Men ; BS = Benevolent Sexism toward Men ; BE = Biological Essentialism ; GSJ = Gender System Justification. $N = 174$. All variables were mean-centered prior to interactions.

[†] $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

ジェンダー常套句を是認する程度に対する各指標の説明力

ジェンダー常套句を是認する程度を目的変数とする重回帰分析を実施した。なお、BSが高い際のHSの高さがジェンダー常套句の是認度に影響を与える可能性と、BSが高い際にGSJの高さがジェンダー常套句の是認度に影響を与える可能性の2つを検討するため、step1でHS, BS, BE, GSJの4指標を説明変数として投入し、step 2でBS \times HSの交互作用とBS \times GSJの交互作用をさらに投入する階層的重回帰分析によって、各説明変数の予測力を検証した。なお、各変数の得点は事前に中心化されていた。

階層的重回帰分析（強制投入法）を実施した結果（Table 2）、BSの正の効果が有意であった（ $\beta = .69, t = 10.91, p < .001$ ）。また、step 2の説明率（ $R^2 = .54, p < .001$ ）、BS \times HSの交互作用項とBS \times GSJの交互作用項投入による R^2 の変化量（ $\Delta R^2 = .05, p < .001$ ）およびBS \times HSの交互作用項とBS \times GSJの交互作用項の標準偏回帰係数（ $\beta = -.20, t = -3.58, p < .001$; $\beta = .12, t = 2.11, p = .037$ ）が有意であった。

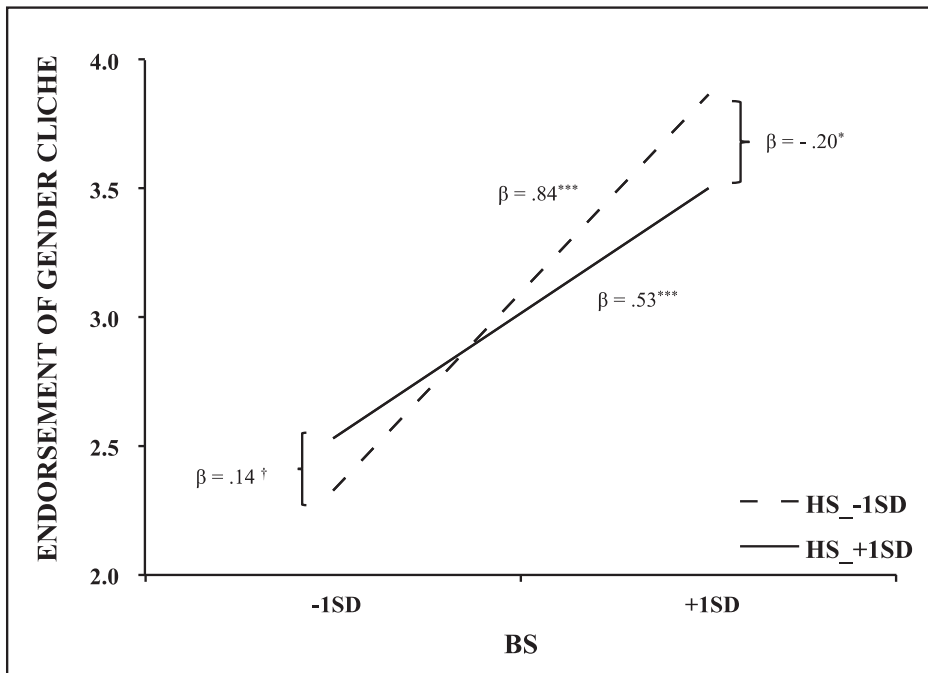


Figure 1. Relationships between Hostile Sexism and Benevolent Sexism toward Men, and Endorsement of Gender Cliché in Female Students (Simple Slope Analysis).

Note. $N = 174$; HS = Hostile Sexism toward Men; BS = Benevolent Sexism toward Men.

$^\dagger p < .10$. $* p < .05$. $** p < .01$. $*** p < .001$.

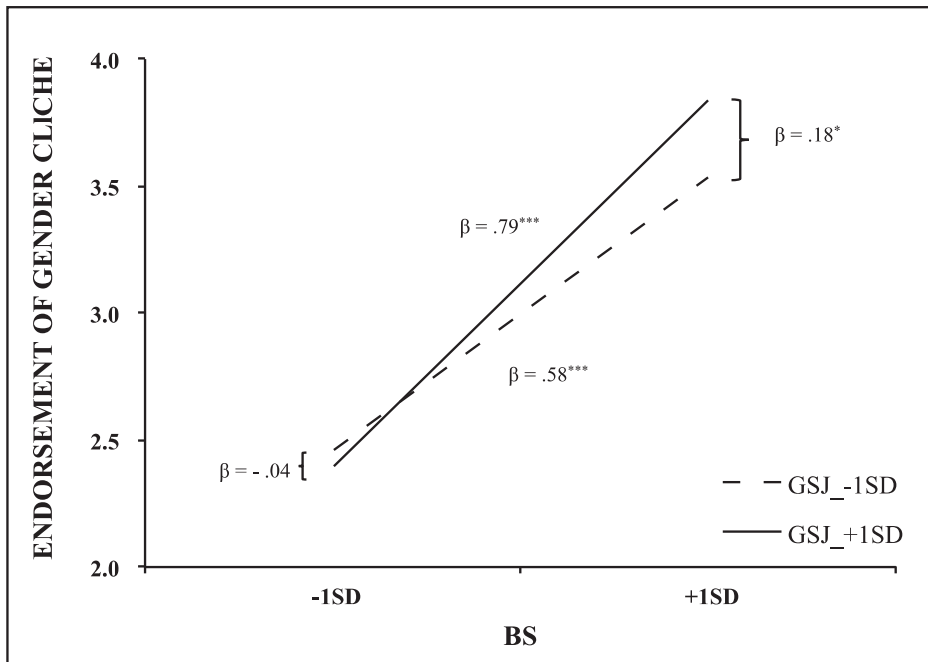


Figure 2. Relationships between Benevolent Sexism, Gender System Justification, and Endorsement of Gender Cliché in Female Students (Simple Slope Analysis).

Note. $N = 174$; BS = Benevolent Sexism toward Men; GSJ = Gender System Justification.

$^\dagger p < .10$. $* p < .05$. $** p < .01$. $*** p < .001$.

次に、BS×HSの交互作用を検討するため、単純傾斜検定を実施した結果 (Figure 1), HSが高い場合 (+ 1SD)・低い場合 (- 1SD) におけるBSの単純傾斜がそれぞれ0.1%水準で有意であり (順に $B = .87, t = 11.24, p < .001$; $B = .55, t = 7.17, p < .001$), BSが高い場合におけるHSの単純傾斜も5%水準で有意であった ($B = -.25, t = -2.37, p = .019$)。なお, BSが低い場合のHSの単純傾斜には有意傾向が認められた ($B = .14, t = 1.75, p = .082$)。

また、BS×GSJの交互作用について検証するため単純傾斜検定を実施した結果 (Figure 2), GSJが高い場合・低い場合におけるBSの単純傾斜がそれぞれ0.1%水準で有意であり (順に $B = .81, t = 10.45, p < .001$; $B = .60, t = 7.40, p < .001$), BSが高い場合におけるHSの単純傾斜も5%水準で有意であった ($B = .17, t = 2.16, p = .032$)。しかし, BSが低い場合におけるHSの単純傾斜は統計的に有意ではなかった ($B = -.04, t = -0.46, p = .644$)。

考察

本研究の目的は、ジェンダー常套句を受け入れやすくしている個人差要因を、女子学生を対象に検討することであった。特に、ジェンダー常套句に対する受容しやすさを両面価値的性差別が予測するかどうかに関心が当てられた。とりわけ、慈愛的性差別態度が持つ、心理的な男女の違いを相補的文脈で捉えるという特徴が、社会の中で男女が異なった扱いを受け不平等が生じている事実を正当化するという側面に注目することで、男女の違いを対比的に表現したジェンダー常套句に対する受容傾向は、慈愛的性差別の高さにより予測されるという仮説が導かれた。研究の結果から、慈愛的性差別の高さがジェンダー常套句を受け入れる程度を非常に強く予測することが示され、この仮説は支持された。

また、慈愛的性差別主義は、相補的な捉え方によって男女の違いを受け入れやすくするだけでなく、違いがあるということそれ自体への注目しやすさを高めさせる可能性がある。一方で、敵意的性差別主義は、女性が社会の中で男性とは違う扱いをされることに対し、強い敵意を感じさせる可能性がある。したがって、本人の中で、慈愛的性差別が高いと同時に敵意的性差別も高い、という女性の場合には敵意を生み出す対象に注目が向きやすくなることで、慈愛的性差別が高いと同時に敵意的性差別は低い、という女性に比べ、ジェンダー常套句への是認度は低くなるだろう、という仮説が導かれた。研究の結果、慈愛的性差別主義が高い場合に、敵意的性差別も高い女性は敵意的性差別が低い女性に比べジェンダー常套句への是認度が低いことが示され、この仮説は支持された。

さらに、本研究では、性差を過大視しやすい傾向や、社会におけるジェンダー不平等な状況を正当化する傾向と関連する個人差として、生物学的本質主義とジェンダーシステム正当化動機を取り上げた。そして、男女の違いの不変性に大きく焦点が当てられる生物学的本質主義より、社会の中での男女の在り方を規定している現行の社会システムを正当化しようとする動機の方が、対比的に男女を描写するジェンダー常套句を積極的に受け入れようとする

だろうという仮説が導かれた。研究の結果、確かにこれら2つの個人差特性は、ジェンダー常套句の受容しやすさと正の相関を示したが、ジェンダー常套句の受容しやすさを直接的に予測してはいなかった。従って、この仮説は支持されなかった。

しかし、ジェンダーシステムを正当化しようという動機は、慈愛的性差別主義が高く、男女の違いを相補的に見るよう促されている場合に初めて、男女の違いをシステム正当化の種として用いるという動機と結びつく可能性が考えられる。従って、慈愛的性差別主義が高い場合にのみ、ジェンダーシステム正当化動機の高さがジェンダー常套句の是認度の高さを予測するという仮説が導かれた。研究の結果からは、慈愛的性差別が高い場合にはジェンダーシステム正当化動機がジェンダー常套句の是認を促し、慈愛的性差別が低い場合にはジェンダー常套句の是認度を予測しないことが示され、この仮説は支持された。

これらの結果から、慈愛的性差別主義の高い女子学生が、ジェンダー常套句を受容しやすいことが示された。その理由として、慈愛的性差別主義には、男女の関係性を相補的文脈で捉えることで現状のジェンダー不平等を合理化する働きがあるためと考えられる。そして、世間に流布した男女の違いに関する多くの言説が、男女の違いを対比的に描写していることを考えると、人々が男女に心理的な違いを見出そうとする背景に、現行の社会における男女の関係性を維持しようという動機が存在している可能性が高い。

本研究の限界

本研究は、調査により複数の心理指標間の関係性を検証したにすぎない。したがって、明確に因果の方向性を規定するような知見が示せていないことが、本研究の最大の限界と言える。特に、今回用いた心理指標は、ジェンダーに関する現行の社会システムの正当化に対して、いずれも関連性が指摘されている。そのため、実際に個々人の中でどのような心理プロセスが生じているのかを明確に示すためには、それぞれの指標を実験的に操作し、因果の方向性を特定することが大変重要と言える。また、本研究は女子学生のみを対象に実施されているが、社会におけるジェンダーシステムをより強く感じるようになるのは、社会人としての生活が始まってからである可能性が高い。したがって、学生に限らず、より幅広い女性を対象に研究を行うことも今後必要であろう。

今後の展望

最後に、本研究で得られた知見を発展させる今後の研究の可能性について議論する。

第一に、本研究の結果、ジェンダー常套句の受容度とBSとの間に非常に強い正の相関関係 ($r = .70, p < .001$) が示された点に着目したい。このことは、両者がほぼ同様のものを測定している可能性を示唆しており、ジェンダー常套句の内容が慈愛的性差別の方向に偏っていることが考えられる。しかし、ジェンダー常套句への受容度を測定することで、差別的態

度としては比較的「あからさま」ではないとされるBSを、社会的望ましさの影響をより一層受けにくい形にして測定できる可能性が秘められていることも考えられる。あるいは、ジェンダー常套句の受容度とBSが、ステレオタイプ化しやすい傾向のような同一概念を測定しており、常套句の受容度が高い人物はジェンダー以外のステレオタイプ（e.g., 民族ステレオタイプ）についても、ステレオタイプ化する傾向を強く示すかもしれない。このように、ジェンダー常套句の受容度は、既存の尺度に対する社会的望ましさの反映をより抑制した、有効かつ新しい尺度としての役割を果たすことが期待できる。

第二に、本研究では意図的に調査対象を女性に限定したが、これは男性と女性では、現行社会システムへの正当化動機を高められる引き金が異なることが先行研究から示唆されていたためである。例えば、Jost et al. (2005) によれば、相補的なジェンダーステレオタイプをプライミングすることが、女性に対してのみ、社会システム正当化動機の引き金になると示されている。しかし、一方で、Morton et al. (2009) は、心理的性差は動かし難く、容易に変えられないと主張する情報に晒されると、男性だけが社会システムを正当化することを示している。したがって、男性の場合には、本研究で得られた女性の場合とは異なる心理指標が、ジェンダー常套句の是認度を予測するかもしれない。一つの可能性は、両面価値的性差別理論の枠組みにおいて、男性は女性とは異なる心理指標の影響を受けるという点である。すなわち、本研究で女性にとっては慈愛的性差別が、男女の違いを示す情報に対する受容度を強く予測したが、男性にとっては、敵意的性差別がジェンダー常套句の是認に対し予測力を持つ可能性がある。この点を、今後の研究では検証することが重要と考えられる。

第三に、個人が、自分のジェンダーをどの程度受け入れることができているのかによって、男女の心理的違いを描写する情報への是認度が変わる可能性を検証することが重要である。上述したMorton et al. (2009) で示された結果は、男性が社会の中で女性よりも高い地位を占めていることに起因すると指摘されている。さらにこのことは、男性は現在の社会においては、男性という自らの性別へアイデンティティ化を強めることで、自動的に社会階級的な優越感を得やすくなることも示唆している。さらに、ジェンダーアイデンティティの強さが、まさに性別二分化に対する強力な予測因となることも示されている (Bosson & Michniewicz, 2013)。今回、女性を対象にした研究において、慈愛的性差別主義が他の心理指標との交互作用を示しながら、ジェンダー常套句への是認度を予測したことを踏まえると、ジェンダーアイデンティティの強さという指標単体の予測力だけでなく、今回検証した他の心理指標との交互作用が示される可能性がある。

これらの点を踏まえ、男性と女性の両方を調査対象にし、かつ、ジェンダーアイデンティティに関連した指標を、今回用いられた心理指標とともに検証することで、さらに新たな知見が見出される可能性がある。その意味でも、本研究で示された知見は大変貴重なものといえ、今後の研究の発展も期待される。

付記

本研究は平成29年度井上円了記念研究助成「個人研究」による助成を受けて行われた。

引用文献

- Bastian, B., & Haslam, N. (2006). Psychological essentialism and stereotyping endorsement. *Journal of Experimental Social Psychology, 42*, 228–235.
- Bosson, J. K., & Michniewicz, K. S. (2013). Gender dichotomization at the level of ingroup identity: What it is, and why men use it more than women. *Journal of Personality and Social Psychology, 105*, 425–442.
- Brescoll, V. L., Uhlmann, E. L., & Newman, G. E. (2013). The effects of system-justifying motives on endorsement of essentialist explanations for gender differences. *Journal of Personality and Social Psychology, 105*, 891–908.
- Carothers, B. J., & Reis, H. T. (2013). Men and women are from Earth: Examining the latent structure of gender. *Journal of Personality and Social Psychology, 104*, 385–407.
- Cohen, J. (1988). *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Connelly, K., & Heesacker, M. (2012). Why is benevolent sexism appealing? Associations with system justification and life satisfaction. *Psychology of Women Quarterly, 36*, 432–443.
- Del Giudice, M., Booth, T., & Irwing, P. (2012). The distance between Mars and Venus: Measuring global sex differences in personality. *PLoS ONE, 7*(1), e29265. DOI: 10.1371/journal.pone.0029265
- Ditto, P. H., & Lopez, D. F. (1992). Motivated skepticism: Use of differential decision criteria for preferred and nonpreferred conclusions. *Journal of Personality and Social Psychology, 63*, 568–584.
- Ehrlinger, J., & Dunning, D. (2003). How chronic self-views influence (and potentially mislead) estimates of performance. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*, 5–17.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competent and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878–902.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33 (pp.115—188). San Diego, CA: Academic Press.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile

- and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1997). Hostile and benevolent sexism: Measuring ambivalent sexist attitudes toward women. *Psychology of Women Quarterly*, 21, 119-135.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1999). The ambivalence toward men inventory: Differentiating hostile and benevolent beliefs about men. *Psychology of Women Quarterly*, 23, 519-536.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2011). Ambivalent sexism revisited. *Psychology of Women Quarterly*, 35, 530-535.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2012). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender inequality. In J. Dixon, M. Levine, J. Dixon, & M. Levine (Eds.), *Beyond prejudice: Extending the social psychology of conflict, inequality and social change* (pp. 70-88). New York: Cambridge University Press.
- Glick, P., Wilkerson, M., & Cuffe, M. (2015). Masculine identity, ambivalent sexism, and attitudes toward gender subtypes: Favoring masculine men and feminine women. *Social Psychology*, 46, 210-217.
- Gray, J. (1992). *Men are from Mars, women are from Venus: A Practical guide for improving communication and getting what you want I your relationships*. New York, NY: Harper Collins. (グレイ, J. 大島 渚 (訳) (1993). ベスト・パートナーになるために—男と女が知っておくべき「分かち愛」のルール 男は火星から、女は金星からやってきた— 初版 三笠書房).
- Hall, J. A., & Carter, J. D. (1999). Gender-stereotype accuracy as an individual difference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 350-359.
- Halpern, D. F., Straight, C. A., & Stephenson, C. L. (2011). Beliefs about cognitive gender differences: Accurate for direction, underestimated for size. *Sex Roles*, 64, 336-347.
- Haslam, N., Rothschild, L., & Ernst, D. (2000). Essentialist beliefs about social categories. *British Journal of Social Psychology*, 39, 113-127.
- Hebl, M. R., King, E. B., Glick, P., Singletary, S. L., & Kazama, S. (2007). Hostile and benevolent reactions toward pregnant women: Complementary interpersonal punishment and rewards that maintain traditional roles. *Journal of Applied Psychology*, 86, 574-582.
- Hyde, J. S. (2005). The gender similarities hypothesis. *American Psychologist*, 60, 581-592.
- Hyde, J. S. (2014). Gender similarities and differences. *Annual Review of Psychology*, 65, 373-398.
- 五百田 達成 (2014). 察しない男、説明しない女—男に通じる話し方、女に伝わる話し方—

ディスカヴァー・トゥエンティワン.

- Joel, D., & Fausto-Sterling, A. (2016). Beyond sex differences: New approaches for thinking about variation in brain structure and function. *Philosophical Transactions of Royal Society B: Biological Sciences*, 371 (1688), 1-9.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Jussim, L. (2012). *Social perception and social reality: Why accuracy dominates bias and self-fulfilling prophecy*. New York: Oxford University Press.
- Keller, J. (2005). In genes we trust: The biological component of psychological essentialism and its relationship to mechanisms of motivated social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 686-702.
- Kray, L. J., & Haselhuhn, M. P. (2012). Male pragmatism in negotiators' ethical reasoning. *Journal of Experimental Social Psychology*, 48, 1124-1131.
- Kray, L. J., Howland, L., Russell, A., & Jackman, L. M. (2017). The effects of implicit gender role theories on gender system justification: Fixed beliefs strengthen masculinity to preserve the status quo. *Journal of Personality and Social Psychology*, 112, 98-115.
- 黒川 伊保子 (2012). キレル女 懲りない男—男脳・女脳が謎を解く— 筑摩書房.
- Lee, T. L., Fiske, S. T., & Glick, P. (2010). Next gen ambivalent sexism: Converging correlates, causality in context, and converse causality, an introduction to the special issue. *Sex Roles*, 62, 395-404.
- Morton, T. A., Postmes, T., Haslam, S. A., & Hornsey, M. J. (2009). Theorizing gender in the face of social change: Is there anything essential about essentialism? *Journal of Personality and Social Psychology*, 96, 653-664.
- Nguyen, H. D., & Ryan, A. M. (2008). Does stereotype threat affect test performance of minorities and women? A meta-analysis of experimental evidence. *Journal of Applied Psychology*, 93, 1314-1334.
- Pease, A., & Pease, B. (2000). *Why men don't listen and women can't read maps: How we're different and what to do about it*. New York, NY: Welcome Rain. (ピースA. ピーズB. 藤井 留美 (訳) (2000). 話を聞かない男, 地図が読めない女—男脳・女脳が謎を解く— 初版 主婦の友社).
- Rothbart, M., & Taylor, M. (1992). Category labels and social reality: Do we view social categories as natural kinds. In G. R. Semin & K. Fiedler (Eds.), *Language and social cognition* (pp. 11-36). London: Sage.

- Rudman, L.A., & Fairchild, K. (2004). Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 157—176.
- Ruti, M. (2015). *The age of scientific sexism: how evolutionary psychology promotes gender profiling and fans the battle of the sexes*. New York, NY: Bloomsbury Academic.
- 阪井 俊文 (2007). セクシズムと恋愛特性の関連性の検討 心理学研究, 78, 390-397.
- Spencer, S. J., Steele, C. M., & Quinn, D. M. (1999). Stereotype threat and women' s math performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 4-28.
- World Economic Forum. (2015). *The global gender gap report* (10th ed.). Geneva: World Economic Forum.
- Zell, E., Krizan, Z., & Teeter, S. R. (2015). Evaluating gender similarities and differences using metasynthesis. *American Psychologist*, 70, 10-20.

Women Who Endorse Gender Clichés That Exaggerate the Psychological Differences between Men and Women

KURAYA, Takumi

Abstract

Throughout the world, we find many gender clichés that exaggerate the psychological differences between men and women. In this study, a survey was conducted on the degree to which female students ($N = 174$) endorse gender clichés that reflect psychological gender dichotomization. In particular, the focus was whether two types of sexism (i.e., hostile sexism [HS] and benevolent sexism [BS]) predicted endorsement. The results showed that the higher they scored on BS toward men, the more they endorsed gender clichés. Moreover, among female students who scored high on BS, those who scored higher on HS endorsed gender clichés weakly compared to those who scored lower on HS. Also, high BS women who scored higher on gender system-justification beliefs endorsed gender clichés strongly. Finally, implications for identification effects with one's own gender or gender self-esteem on endorsement of gender dichotomization and gender cliché were discussed.

Keywords : Ambivalent Sexism Theory, Gender Clichés, Gender Stereotypes, Gender Dichotomization, Gender System Justification, Biological Essentialism